心理科学部
臨床心理学科編

OB訪問

今回訪ねたのは、札幌から高速道路で2時間弱、噴火湾に臨み
冬の長い北海道のなかで、ひと足早く春が訪れる伊達市。
臨床心理士として9年のキャリアをもつ河内さんは、本学OB、
そして大学院博士課程で学ぶ現役の社会人大学院生です。

北海道社会福祉事業団「太陽の園」
発達援助センター　主任心理士
河内 哲也さん（看護福祉学部医療福祉学科臨床心理専攻2000年卒業、
大学院看護福祉学研究科臨床福祉・心理学専攻修士課程2002年修了）

※上記学部・大学院は現在の心理科学部・心理科学研究科です。

担当教員との約束。

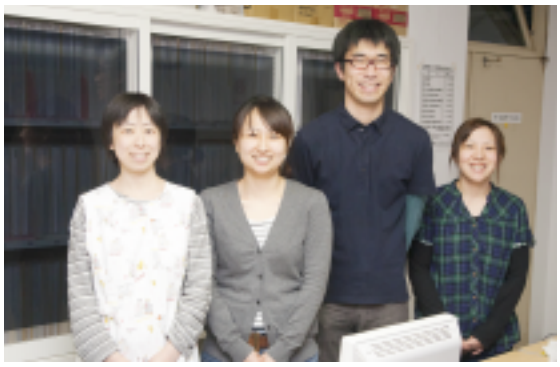
伊達市街地の向こうに大きく太平洋を望む「太陽の園」は知的障がい者総合援護施設のモデルとして1968年、全国に先駆けて設立されました。同園の、発達援助センターが今回ご紹介する河内さんの職場です。心理士として働き始めたのは2002年、大学院修士課程を修了し博士課程受験を目前にした時期に研究室に舞い込んだ求人からでした。「ゆくゆくは臨床と研究を並行して実践しながら臨床家の育成に貢献」を目標にする河内さんは、考えていた博士課程進学、臨床の順番を入れ替え、担当教員に「臨床経験を積み戻って来ます」との約束を残し、思いがけず開いた臨床の扉へと進んだのです。そして2011年4月、河内さんはその約束を果たし博士課程に入学しました。

行動療法の実践者。

河内さんは「太陽の園」発達援助センターで主任心理士として発達障がいの子どもの支援にあたっています。臨床心理士、認定行動療法士、臨床発達心理士の資格をもち、主に2～16歳の子どものアセスメント（心理検査・発達検査・知能検査など）、心理療法、母親のカウンセリングを行います。

心理療法には行動療法を取り入れています。カウンセリングに加え、心理士が一歩踏み込んで、できることから少しずつ働きかける方法です。例えば、おもちゃがある→「取って」と声に出して言う→おもちゃが得られる・ほめられる、という3ステップを繰り返します。望ましい行動をとれば自分にメリットがあることを子どもが学習し日常的に同様の行動をとれるよう、また同時に、望ましくない行動を減少できるよう、様々なシチュエーションで行います。子どもの行動の変化に周囲が気づき適切に反応することが大切ですから、親や学校の先生と連携しながら進めます。

「発達障がいは、周囲の理解と配慮で安定して日常生活を送れるようになるケースが多いです。ですから私の仕事の半分は獲得したほうがいいスキルを子どもに教えること、半分はその子を取り巻く環境づくりです」。河内さんは行動療法でスキルを教え、定期的にフォローすることに加え、周囲が継続的にその子を支援していくための調整・連携にも力を注いでいます。



受付・医療事務（左）、河内さんの両隣は言語聴覚士です。医師、作業療法士はじめ、スタッフは誰も白衣を着ません。子どもへの配慮はもちろんですが、職員間の垣根も低くなるのか、温かなチームワークが伝わってきます。

地域が頼りにする心理士。

河内さんと話していると、地域社会における心理士の役割が欠かせないものとなっていることがわかります。乳幼児検診での発達相談、市町村の療育に関わる職員への助言、保育園や幼稚園、小中学校に出向いて気になる子どもがいればその保育・教育への助言など地域での業務が河内さんの仕事の約3分の1を占めるそうです。

発達障がいの子どもが安定して生活を営めるよう、母親・家族が安心して笑顔でいられるよう、河内さんは地域社会のなかを縦、横、斜め、自由に歩き、療育機関・施設と地域をしっかりつなぎながら行動する心理士です。

自分のことは飾らない。

臨床の醍醐味を伺うと、「自己満足」との答えが返ってきました。普通は「達成感」というところでしょうが、本音をさらけ出すような表現に驚かされます。よかれと思うことを実践しながら進み、子どもの行動に反映されたとき、母親が喜んだとき、臨床の「覚悟していた以上の手強さ」を補ってなお余りある大きな自己満足を得るそうです。「それが次へ進むためになくてはならない動機づけになります」。柔らかな印象の奥に、現場に臨む者の潔さが垣間見えます。

臨床に出てすぐ、目の前の子どもの様子、反応を見逃さず、本学で得た知識と的確に結びつけることの難しさを痛感した河内さん。以前にも増して論文を読み、研究会や学会にも精力的に参加しています。

研究対象は心理士。

河内さんは臨床家として多くの子どもたちの歩みに寄り添いながら、研究では基礎的なものに取り組んでいます。修士論文から続いて博士論文でも、テーマは「心理士の認知」、つまり頭の中。多くの心理士に協力してもらい実験を重ね、心理士がクライエントをどう考え、どう見立てているか、知識や情報をどう整理し、利用しているかを探っています。心理士の認知の特徴をつかみ、それを生かした有効で効率的な心理士育成の教育法へと発展させることが狙いです。

臨床と研究、二足のわらじを履き、ますます多忙を極める河内さんですが、「頑張る。でも頑張り過ぎない」という自身のスタイルを貫きながら、いつかきっと臨床と研究、教育の見事なハーモニーを心理学のステージで奏でてくれることでしょう。期待しています!

学部、大学院修士課程の6年間、軽音楽部でベースとギターを担当し、大学祭（写真）ほか、当別町の飲食店を借り切ってライブも開催。演奏と共に、ライブの企画、会場設営など一連のプロセスを存分に楽しんだといいます。